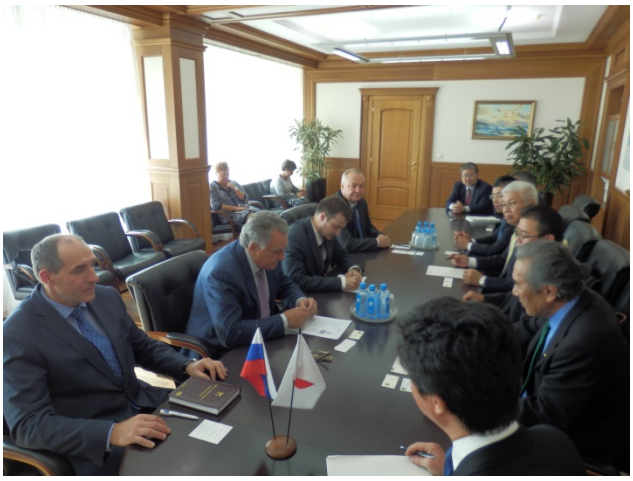
平成２７年度
鳥取県議会ロシア沿海地方訪問団
報告書

〔平成２７年１１月１日（日）～５日（木)〕



沿海地方議会

太平洋国立医科大学

ウラジオストク港湾施設

51番学校

鳥取県議会

ロシア連邦

沿海地方

沿海地方

１　訪問日程及び訪問先

平成２７年１１月１日（日）～５日（木）
ロシア連邦沿海地方ウラジオストク市
※　詳細は「４　日程表」のとおり

２　訪問団メンバー

団　長　　内　田　博　長　議員
副団長　　濵　辺　義　孝　議員
秘書長　　森　　雅　幹　議員
団　員　　藤　井　一　博　議員
＜随　行＞　議会事務局調査課　　課長補佐　木村　良成
　　係　　長　尾﨑　正高
　　文化観光局交流推進課　国際交流員　ﾘｰ･ｳﾞｬﾁｪｽﾗﾌ

３　所感及び県政に対する提言

今回の県議会によるロシア沿海地方訪問は、鳥取県と定期貨客船で結ばれるロシア沿海地方との交流促進に加え、2012 年９月にロシア・ウラジオストクで初めて開催されたアジア太平洋経済協力会議（ＡＰＥＣ）後の現地情勢を把握し、今後の交流発展の可能性を調査することを目的に行った。

まず、ロシア沿海地方議会のゴルチャコフ議長を表敬訪問し、今後、あらゆる分野での協力体制を構築するために、両地域は議会間の協力促進を引き続き行っていくことで合意した。
ロシア沿海地方では、農業を経済発展の基点の一つとして位置づけており、ゴルチャコフ議長からは、農産物の輸出に積極的に取り組みたいとの意向があったほか、日本が持つ高い農林水産加工技術（特に低温保管技術）についての関心を示された。鳥取県には世界に誇る「氷温技術」を有する企業があり、今後の連携の可能性を感じた。

沿海地方はロシア連邦の中でも日本との関係が特に深い地域である。明治初期にはすでに日本政府の事務所が設置され、多くの日本人が居留するなど、ウラジオストクは「浦塩」「浦潮」と呼称され、親しまれていた。第二次世界大戦後にウラジオストクが閉鎖都市とされるなどの動きはあったものの、ソ連崩壊後の 1992 年に再び解放されたことを受け、日本との定期航路が順次開設され、今日に至るまで様々な分野での日露交流の一大拠点となっている。

本県では、ロシア沿海地方との相互交流は、すでに 20 年以上の経験を有している。1991 年に島根県と合同で友好親善訪ソ団（111 名）を派遣し、「友好交流に関する覚書」を締結して以降、同地方との交流を本格的にスタートし、スポーツ・民俗芸能・観光物産などの面で相互理解を深めてきたところである。2010 年には「友好交流及び協力に関する協定」を締結、その動きをさらに活発化させており、農産物の販路開拓、学術交流などにも範囲を広げるとともに、両地域の架け橋となる人材を確保するため、「鳥取県サポーター」の育成にも取り組んでいる。同じく 2010 年に観光客誘致や貨物創出等を進めるため、「鳥取県ウラジオストクビジネスサポートセンター」を開設した。さらに、2015 年７月には「貿易・投資の発展に関する協力協定」を結び、互恵的な経済発展を目的として新規ビジネス創出等に取り組んでいるところである。

今回の訪問で感慨深かったことは、まず、ウラジオストクに対する印象の変化である。ＡＰＥＣをきっかけとして、幹線道路が舗装され、町並みも美しく変化していた。ウクライナ情勢によって経済全体に不透明感が広がっているとはいえ、同地の経済発展を感じさせるのに十分なものであった。さらに、各訪問先では、「鳥取県文化デイズ」などこれまでの鳥取県の取組に対する評価が高く、引き続き鳥取県がロシアにおいて取り組む事業があれば積極的に協力する準備があるとの発言があり、今後、魅力的な企画があれば、さらに交流が発展する可能性があることが感じられたことである。

一方で、ウラジオストク市内のホテルをはじめとする各施設等の案内は、ロシア語の他、中国語、韓国語が主流で日本語の表記はほとんどなく、ウラジオストクを訪れる外国人の中では日本人は少数派（２０１４年に沿海地方を訪れた外国人観光客１０万８千人の内、日本人は６千９６０人に）であることを実感した。貿易相手国をみても対中国が約半分を占め、続いて韓国、日本となっている状況であり、ロシアとの観光交流・経済交流等をさらに進めるためには、より一層の施策展開が必要であると感じた。

訪問先との意見交換も精力的に行った。その中で、鳥取県から韓国・東海を経由し、ウラジオストクを結ぶ DBS クルーズフェリーについては、「船内の案内看板にロシア語表記がなく、ロシアを有望な観光誘客市場として捉えているのか」、「乗り心地が悪く船内で楽しめる要素が必要」、「活用がまだまだ不十分ではないか」との指摘があった。このようなことから、２００９年の就航以来６年が経過した同フェリーについては、財政的支援を行ってきた県の立場として、改めてニーズをしっかりと把握し、顧客にとって魅力的な船旅を提案できるようなものとするため、現在の運行状況を改善していくよう DBS クルーズ社に働きかけ、また、県としても貨物船としての機能を有効活用する方策を検討する必要がある。

2010 年に開設され、本年度市内中心部に移転した鳥取ウラジオストクビジネスセンターでは、通常業務として、沿海地方の行政・経済関係者等との連絡調整、県内企業の貿易投資関連の相談と支援、観光情報の発信等に取り組んでいるところであるが、更なるテコ入れ策として鳥取の食材を利用した料理フェスティバルなどが計画され、ロシアでは数少ない日本についての情報発信に積極的に取り組んでいる様子が確認できた。また、ウラジオストクに進出しようとする日本人に対しての情報や支援が不足している状況についても説明を受け、県においても県内の事業者等へ更なる情報提供を行っていく努力が必要であると感じた。

ロシアでは「日本の製品・商品は高機能で付加価値が高い」との認知度が少なからずあるものの、それであるゆえに、いわゆる「大手メーカーのブランド力」が高く、地方の商品はなかなか売れないのが実情であるとのことだが、鳥取の商品では、例えば「どら焼き」はロシアで勝負できる商品であるとの評価を受けており、販路開拓に向けた取り組みを検討している。販路開拓の実現には、興味・試行・認知・定番化などクリアすべきハードルは多いものの、今後、さらに「梅酒」などの販路開拓の可能性がある他の商品の展開についての可能性も感じたところである。

また、日本では、本県以外にも富山県や新潟県などがロシア沿海地方との観光交流促進を行っており、一見、競争相手にも見えるが、例えば、DBS クルーズフェリーと来年開設される予定の新潟－ウラジオストク間の航路などと連携した鳥取－ウラジオストク－新潟などの三角航路による観光商品開発構想なども念頭においており、今後、県の担当や関係者の密な連携により適宜取り組まれることを期待するものである。情報発信の仕方や旅行の企画次第で人を多く呼び込める可能性がある地域であるとの担当者のコメントは非常に強く印象に残った。

ウラジオストクで唯一、小学校から日本語教育を義務化して行っている５１番学校での調査は、日本とロシアとの教育制度の違いはあるものの、その内容は興味深いものであった。

この小学校は、今回訪問した施設等の中で、唯一、日本語表記が多い施設であった。日本語教育では、日本の教材やゲームを使用するなど、各教員が工夫して取り組んでおり、教育に対する熱心さが感じられた。

同校では、この学校を将来的に日本に関係した仕事をしたいと考える人たちの入り口としたいとの方針を持っており、校内での日本語教育のほか、日本でのホームステイなどの交流もある程度進んでいる。この結果、卒業後は日本語教師となったり、日露ビジネスに携わる方が多いとのことである。鳥取県としても日本語に親しむ子供たちとの交流事業をさらに進めることにより、将来的に鳥取県とロシアとを結ぶ架け橋となる人材と友好関係を持ち、地道に「鳥取県ファン」を育てていくことは、非常に意義のある取り組みであると感じた。

医療ビジネス創出の可能性を探るため、太平洋国立医科大学と北斗画像診断センターを訪問した。太平洋医科大学は鳥取大学医学部との間で「教育、学術及び医療分野への協力に関する覚書」及び「学術交流協定書」を交わしており、北斗画像診断センターは、北海道帯広市にある社会医療法人北斗が医療ビジネスの先駆的取組として当地に開設した医療機関である。

いずれも、一定の医療技術の習得や診断成果を得るために、日本との関わりを重要なものとして位置づけていた。

画像診断など、インターネットを利用した取組などは、ビジネスとしての取組だけではなく、国境を越えた高度医療の提供として大学、医療機関、行政が、確立した医療連携として取り組み、高度医療を必要とする方々への国際貢献となり得るのではないかと感じた。

鳥取大学は西日本の国立大学病院で初めてダヴィンチ（内視鏡手術支援ロボット）手術の症例が５００例に達するなど高い医療水準を有しており、太平洋国立医科大学で学ぶ学生にとってのメリットは大きいと考える。また、同医科大学から鳥取大学医学部に派遣された学生からは、医学だけではなく温泉や豊かな自然などに触れたことへの喜びの声があったとのことであり、相互交流の将来的な効果として、国際感覚豊かな医師の育成に対する期待が高まるところである。

また、今回の訪問で特に留意したのは、ウラジオストク自由港と経済特区の動向、投資環境の整備状況についてであったが、今回の調査では、どこの訪問先でも詳細な情報を得られることはできず、どのような内容であるのかをしっかりと把握することはできなかった。今年 10 月にウラジオストク自由港法が施行され、様々な優遇措置や外国人に対する査証の一部緩和が実施されるとのことであるが、その影響や効果予測については現地関係者にもまだ不明なようであり、対外的なプロモーション活動も不足しているように感じた。しかしながら、各調査先において、貿易・医療をはじめとするあらゆる分野において規制緩和の広がりを期待する声が多かったのもまた事実である。

このたびウラジオストク国際空港に降り立ち、最初に驚いたのは、おそらく９割以上を占めるのではないかと思われる日本車の多さである。前述したように、ロシア沿海地方と日本とは古くからゆかりがあり、現在でも生活の中に確実に日本ブランドが息づいている。そして日本を交流・経済発展の大切なパートナーであると考えており、将来に渡っても互恵的な交流ができる可能性を十分に秘めた地であることが確認できた。

現在はロシア経済全体の低迷による景気の不透明感が広がっているものの、ロシア政府は国を挙げ、沿海地方を経済浮揚に向けた起爆剤のひとつにしたいと考えているのは明らかである。

今後、鳥取県においても詳細な情報収集と適切な情報提供、関係者との人脈構築につとめ、県内企業の販路拡大等、沿海地方での事業展開に資するような取り組みを確実に展開する必要があると感じた。訪問団一同、その動きを注視しつつ、必要な支援を行っていきたい。

４　日程表

■11 月 1 日（日）

08：35　鳥取空港　→　09：50　羽田空港　［ANA294］
09：00　米子空港　→　10：15　羽田空港　［ANA384］
羽田空港　→　成田空港（第２ターミナル）［リムジンバス］
15：25　成田空港　→　19：05　ウラジオストク空港　［S7　566］
19：40　ウラジオストク空港　→　21：00　ヒュンダイホテル
21：15　夕食（ホテル内のレストランを想定）　（ウラジオストク泊・ヒュンダイホテル）

■11 月 2 日（月）

08:30　ホテル発
09:00　ウラジオストク日本センター訪問
11:00　沿海地方国立美術館訪問
12:00　レストランタイガ訪問（昼食）
14:00　沿海地方議会訪問
15:30　太平洋国立医科大学訪問
17:00　鳥取ウラジオストクビジネスセンター訪問
（ウラジオストク泊・ヒュンダイホテル）

■11 月 3 日（火）

08:30　ホテル発
09:00　ウラジオストク港湾施設訪問
11:00　５１番学校訪問
14:00　沿海地方経済特区視察
16:00　北斗画像診断センター訪問
（ウラジオストク　泊・ヒュンダイホテル）

成田-ウラジオストクを結ぶS7航空機

■11 月 4 日（水）

09：00　ホテル発
12:00　ナホトカ市内日本人墓地での献花
13:30　ナホトカ港視察
（ウラジオストク　泊・ヒュンダイホテル）

■11 月 5 日（木）

08:30　ホテル発
11:00　ウラジオストク空港付近の日本人墓地での献花
13：05　ウラジオストク空港　→
14：30　成田空港　［S7　565］
成田空港　→
羽田空港［リムジンバス］
19：30　羽田空港　→
20：50　鳥取空港　［ANA299］
18：25　羽田空港　→
19：45　米子空港　［ANA387］

ウラジオストク空港ビル

５　訪問先の概要

【平成２７年１１月２日（月）】

（１－１）ウラジオストク日本センター

〔応対者〕河原和尊所長

河原所長から、沿海地方の日系企業の状況や、鳥取県に関するアンケートの概要などについての説明を受けた。

【主な説明内容】

●日本センターはロシア内に６カ所あり、ロシア経済の支援、若手経営者育成などを通じ日露経済交流の支援を行っている。

●１４２名の日本語受講者に対して鳥取県に関するアンケートを行い、女性２９名男性７名から回答があった。回答の主なものは次の通りである。

・約３分の１が鳥取県のことを知っている。

・知っていることは、境港、水木しげる、梨、温泉、フェリーで行ったことがあるなど

・知った媒体は、インターネット、パンフレット、物産展などである。

●日本の製品で気に入っているもの、使っているものは、中古自動車、サニタリー用品、化粧品が多い。

●ジャパンデーでは、着物ショー、料理教室の人気が高かった。

●ロシア各都市の日系企業

都市名	企業数
モスクワ	１９８
サンクトペテルブルグ	５７
ニジニー・ノブゴロド	６
ハバロフスク	１０
ユジノサハリンスク	１７
ウラジオストク	４７

●極東の貿易状況

・日本、中国、韓国で約８０％

・２０１４年、貿易高では日本が１番（シェア２６．３％）であった。

●先進発展地区（経済特区）については、ロシア企業の参加が条件である。詳細はよくわからない、はっきりしたらセミナーを開きたい。

【質疑の概要】（○：訪問団、●河原所長）

○傾向としては、日系企業は増えているのか。

●はなまる、ホクト、ＨＩＳなど増えているが飲食業は浮き沈みが激しい。商社で駐在員事務所を開く予定もある。

○商社が扱うものは

●輸出はガス、原油が９０％、その他木材、魚、農業製品など。輸入は、車台、自動車部品、石炭など。住友、三井、丸紅などはコンスタントに物流がある。

○銀行の許可が取れないのは政府の考え方か。銀行がないと取引できない。

●金融は政府が守ろうとしている。政府内部でも金融のことはもめている。東京三菱銀行がモスクワに店を開いているが個人の口座は持てないと聞いている。
シティー、東京三菱、三井住友、みずほはモスクワで営業しているが、時差の関係で、２時間で取引しないといけない。しかし、取引はできる。
ロシアの銀行は、瞬時に取引ができない点があるが、そのほか金利が高いこと以外は銀行業務自体にクレームをつけるようなことはないが、金利の高さや政府の保護政策がロシア経済の発展にブレーキをかけているのかもしれない。

ウラジオストク日本センター。1996 年４月に開所し、日本より招聘した講師による経営、金融、マーケティング、貿易実務等の経済セミナー及びロシア人講師による各種現地セミナーを通じて人材育成を支援。ビジネスマン等対象の日本語講座を実施している。また、ロシア人専門家に訪日研修の機会を与え、日本における企業視察を中心とした研修を実施している。さらに日露経済交流の推進を目指し、ビジネスマッチング活動も行っている。

（１－２）沿海地方国立美術館

〔応対者〕ダツェンコ・アリョナ館長、ルスナク・スヴェトラナ副館長

美術館の展示品の説明を受けた後、鳥取県との交流事業の概要について説明を受けた。

館長との意見交換の様子

【主な説明内容】

●昨年度鳥取デーを開催し、押し花、生け花教室を行った。生け花は予約が必要なほど、高い関心があった。

●２０１３年には倉吉絣の展示会を行った。前館長は大変気に入っていた。

展示物の説明を受ける訪問団

●生け花、絣に対してロシア人は高い関心を持っており、今後も催しを実施していきたい。

●鳥取県の友好的な姿勢に感謝しており、今後もそれぞれの関係がよくなって、日本の文化を再発見できればと思う。ウラジオストクを訪れるロシア人や外国人にも触れてもらいたい。

●鳥取県で、いい催しの案があれば協力する。

【質疑の概要】（○：訪問団、●ダツェンコ・アリョナ館長）

○美術品は戦時中に集めたものか。

●１９３０年代に命令で持ち込まれた。労働者、一般市民が文化に触れられるようモスクワなどから地方へ送られてきた。

○エルミタージュ美術館では、何でこんな絵がこんなところにという感じだった。ここでも、いいものが来ていると感じた。

●エルミタージュとの関係は深く、沿海州知事とエルミタージュの理事長が契約を締結し、２０１７年にエルミタージュセンターを開設する予定である。ベースになるのはこの沿海地方国立美術館であり、集中的に準備している

博物館入口付近

（１－３）沿海地方議会

〔応対者〕ゴルチャコフ・ヴィクトル議長

【ゴルチャコフ議長あいさつ要旨】

●鳥取県議会訪問団の訪問を歓迎する。

●日本とロシアとの間の経済環境は厳しい状況にあるが、鳥取県と沿海地方の過去の経験は失いたくない。

●経済特区と自由港法案の二つの準備がある。これは、行政的にも経済的にも優遇措置が検討されているが、現在のロシアへの制裁措置を考えると効果は減少する。

沿海地方政府

【会談の概要】（○：訪問団、●ゴルチャコフ議長）

○ＡＰＥＣ開催前と比べて街全体が明るくなっている。将来的にも鳥取県としては、ＤＢＳクルーズ等を活用した沿海地方との貿易の拡大は重要と考えている。まず、食品関係、野菜、花などに広がればと思う。また、ロシアからも多くの観光客に来ていただいているので、今後も交流を広げていくことが重要である。

●ミハイロフスキー地区の新型特区では、農産品加工事業の施設を計画している。鳥取県の缶詰等の保管技術は興味深い。

数年前試験的に日本向けの農産物の試験栽培を行ったが、輸送、保管技術が未熟であった。日本の低温保管技術を導入して活用できればよかった。

水産加工品は付加価値が低いのが悩みであり、缶詰、冷凍半製品など鳥取県の水産加工事業には注目している。

○氷温技術で長く保存でき、熟成してさらにおいしくなる技術が鳥取県にはある。野菜や果物にも応用されている。

●沿海地方では、大豆、トウモロコシの収穫が多く中国、韓国に輸出している。米も日本の特殊な品種を踏まえて本格的に扱っていきたいと考えている。

○数年前、北海道から農業が入る話があったが。

●具体的な実績は残していない。

沿海地方では、畜産業の発展を進めている。養豚業は自力でやっていける見込みだが、牛は悩みである。

●畜産業は少なかったのか。

○ソ連崩壊後だめになったが立て直そうとしている。

ゴルチャコフ議長（右から２番目）

●ソフホーズ、コルホーズのような大規模は非効率という考え方があった。牛はえさの面から見ても大規模が効率的である。沿海地方では畜産業を成長産業と考えている。
○日本では、米を飼料にしている。大豆にしても米にしても大量に使われるのでは。いい肉を作るためには、いい食べ物が必要である。
●鳥取県と沿海地方の協力分野の一つである。
○ウラジオストク自由港の考え方は。
●ウラジオストク自由港は、ナホトカ港、ボストーチヌイ港なども含み１５の自治体が関係し主要経済拠点が含まれる。具体的な例では、食品業の大きな発展に期待している。新鮮なものをロシア中部に送るため、ウラジオストクをトランジットとして冷蔵庫などの保管能力を整備する。もう一つの効果は、貨物の増加である。ロシア国内への通過点のモデルとして、周辺の港湾施設の能力も増加しようとしている。
自由港は、基本的にはロシア企業を中心とした新たな企業の投資の後押しなので、是非投資のはたらきかけをしていただきたい。
○投資関係を整理しないと日本からは進出できない。
●沿海地方政府には、投資委員会という組織があり、三井の日本人も入っている。在ウラジオストク日本総領事にも助言をもらっている。最も間違いのない選択をしたい。

（１－４）太平洋国立医科大学

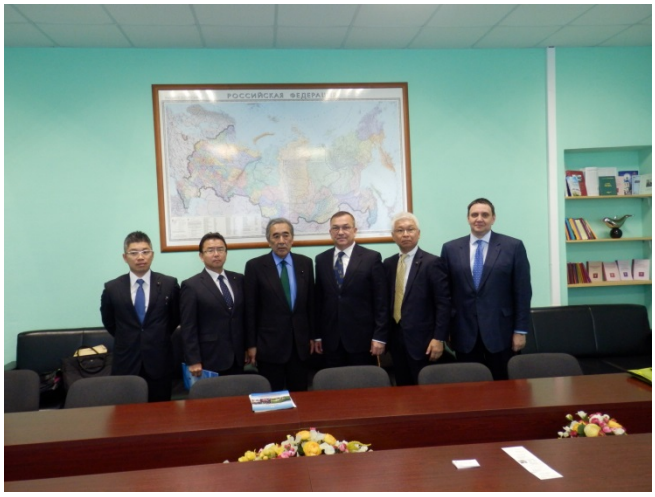
〔応対者〕シュマトフ・ヴァレンティン学長、クヅネツォフ・ヴラジーミル国際交流担当副学長
シュマトフ・ヴァレンティン学長に、大学の概要、大学での日本との交流の状況の説明を受けた後、交流の成果などについて意見交換を行った。

【主な説明内容】
●極東には３つの医科大学があり、本学はその一つである。５千人の学生が勉強している。専門家への研修も行っているので、年間だと７千人が学ぶ。
●大学ではレベルアップのため育成、改善等を行いつつある。
●隣国との経験の交換は重要であり、日本のいくつかの大学医学部と交流している。
●鳥取大学とも専門家の意見交換、学生交換、教師交換を行っている。
●日本の医療技術には大きな関心がある。日本製の医療機械も医療現場に入っているが、使いこなすには交流が大きなポイントとなる。

意見交換の様子

【質疑の概要】（○：訪問団、●大学側）
○交換留学の成果で具体的なものがあるのか。
●留学生交換は１０年以上行っており、鳥取大学とは２年間行っている。２ヶ月前には、鳥取大学に行っていた学生が帰ってきたところ。日本の生活に触れ、日本の病院や学生との交流はしっかりとできたと考えている。大事なポイントとして、留学生は日本語の勉強もしており、学生同士でしっかりと交流ができる準備をしているということ。大学の目的は専門家の育成のみではなく医療現場リーダーの育成も行うことであり、交流は大きな役割を担う。今日のこの議員団の訪問は、今後の交流を進める上で

も意味があると考える。交流では、専門家同士の意見交換もできた。



○専門家同士の意見交換の中で、何が必要か、などの意見は出たのか。

●新潟大学・筑波大学とも交流を行っているが、大学グローバル化プロジェクトとして国の予算で行っている。しかし、鳥取大学とは大学の予算で行っている。財政的な支援があれば、さらに交流が拡大できる。学生の渡航費もネックとなっている。

○大学病院はあるのか。

●ソビエト時代に大学付属病院は必要なしという考え方であった。病院は、私立、地方立、国立がある。大学付属病院を作ろうという考えはある。

○ロシアでも介護の問題はあるのか。

●ロシアでも高齢化が進んでおり年々深刻になっている。働いている人口と高齢者の人口が同じになっている傾向があり、介護問題はこれからさらに深刻になってくる。介護施設、老人ホームのほとんどが国立であるが、最近は人口が多いロシア西部では民間でやるところも出てきている。この傾向は極東においても出てきている。サービスの質は国営と民間で違いがある。

（１－５）鳥取県ウラジオストクビジネスサポートセンター

〔応対者〕事務受託者　株式会社ＪＳＮ　田代雅章代表取締役、オリガ・ソルダトワ　コンサルタント

田代社長、オリガ・ソルダトワ氏に業務の概要の説明を受けた後、質疑を行った。

意見交換の様子

【主な説明内容】

●ＪＳＮは、２２年前にウラジオストクに事務所を構えロシアの経済情報を提供する事業、コンサ
ルタント及び貿易（お菓子、カップラーメン等）を行っている。新生ロシアになってから、日本企業がロシア進出しようにも情報が無かったので、
２０００年から情報誌の発行を始めた。当時は週刊誌だったが現在は月刊誌となった。その当時はプーチンが大統領になり、原油の価格も上がり、これからロシアとの取引が拡大するだろうという時期だった。

●情報誌の発行部数は伸びていない。これはロシアと交易する企業が伸びていないということであると理解している。日露のビジネスについては伸び悩んでいするところがあると思うし、どうしていいかわからないということもあるのだろう。一方で、ハバロフスクでうどん屋を開きたいという相談も受けた。だめだと言われると、逆にちゃんと考える企業もある。

●ルーブルの急落から持ち直していないので、輸入品は値段が高くなり、なかなか売れない。
●一時はロシアではいろんなものが売れるということで、いろいろと進出していたが、撤退するところも出てきて、整理されてきていると感じる。やりやすくもなっているかなと思う。
●日本商品は必要なので必ず売れる。ロシア人は日本製品に慣れている。愛好者が多い。
●地方のものと全国区のものを比べると地方のものはなかなか売れない。大企業のものとは値段が違うし、ロシア人に対するブランド力が違う。
●鳥取県の商品はいくつか取り扱えると考えている。その一つとして「どら焼き」がある。ロシア人はあんこを食べないと認識されているが、ここの職員は食べている。なぜ売らないのかと思っている。県の方とも協議して具体的にやってみようと思っている。

センター入口

●ロシアで増やして行かねばならないのが観光。来年、新潟県がザルビノ便、ウラジオストク便の２航路をやる。競争相手に見えるがいいチャンスである。制度の改正で、現地で８日間までのビザが取得できるようになる。新潟・ウラジオ・鳥取の三角航路で旅行することができる。新潟の人は山陰を知らないが、砂丘、砂の美術館などは面白く、旅行の企画次第である。
●ＤＢＳクルーズフェリーは、ロシア語の表記がない、韓国人相手の船である。これではロシア人は乗らない。改善すべき点である。
●スタッフのオリガ氏は、日本の企業にも勤務していたことがあり、貿易にも日本にも精通している。センターは便利な場所にはあるが知られていないので、大勢の人が集まるような知名度アップの方策を考えている。
●ロシアでは日本の情報が少ないので、情報が得られる場所がわかればロシア人はよく訪れる。
●来年の２月にビーズビー社というレストランを経営する会社と鳥取の料理フェスティバルを行う予定である。ロシアでは、日本の材料も扱っているが使い方がわからない。使い方がわかるようになれば売れるようになる。
●文化デイズでは、押し花、生け花教室を行い、その際には、鳥取サポーターも参加した。

【質疑の概要】（○：訪問団、●田代社長）
○こちらが窓口で起業家の相談に乗るのか。
●鳥取県とセンターが連携してやっていく。
ウラジオストクは人口６０万人程度、１００万人ぐらいあると日本の飲食店などもやりやすいと思う。
○法的な整備（年金、税金、自由港、特区など）がきちんと整っていない。そのあたりが不安なのではないか。
●企業はわからない部分も含めてロシア市場に興味を持っているが、どうしていいのかわからないという状況だ。情報不足はよく指摘される。
経済特区も何ができるかなかなか見えてこない。
○どら焼き以外のものとは何か。

●梅ジュース。そのまま出してもだめかもしれないので、ウオッカベースの梅ジュースカクテルなど工夫が必要だと考えている。
○果物の需要は伸びているのか。
●夏場は中央アジアからいろいろなものが入るが、冬場は（限られるので）需要がある。日本からはリンゴはものすごく入ってきていたが、為替の影響で入りにくくなっている。もう少し安く入ればあらゆる果物の需要はある。夏だと中央アジアのスイカは何十円だが、日本のスイカは何千円になる。
○鳥取県の場合はＤＢＳフェリーがあるので輸送はできる。使い道がないのがもったいない。

室内に飾られた鳥取県の案内板

【平成２７年１１月３日（火）】

（２－１）ウラジオストク港湾施設（商業港）

〔応対者〕ウラジオストク商業港　アレキサンダー・バスコフ営業部長　外
港湾の概要説明を受けて質疑を行い、その後港湾施設の案内を受けた。（港湾施設内は写真撮影禁止）

【主な説明内容】
●ウラジオストク港湾はロシアでも歴史が長く（1897 年設立）、重要な港湾施設であり、金角湾に面した太平洋へのゲートである。
●商業港は、ＦＥＳＣＯ（極東船会社グループ）が管理している。ＦＥＳＣＯは、鉄道、海上輸送、物流も行っており、民間船会社の大手の一つである。
●１５本の岸壁を持ち、その総延長３㎞である。道路網、シベリア鉄道とも直結している。また、石油、自動車、コンテナ、汎用の各ターミナルを有している、
●自動車ターミナルは、取り扱い能力年間 15 万台で、倉庫、鉄道など自動車取り扱いに必要なイ

ンフラはすべて整っている。

●コンテナターミナルは、年間取り扱い能力５０万ＴＥＵ、約１．５万ＴＥＵが一時保管できる。
週 15～17 本のコンテナ列車が出発している。
●汎用ターミナルでは、金属、アルミ、パルプ、木材、穀物の取り扱いも可能である。100 トンまでつり上げられるクレーンも整備されている。
●取り扱い実績としては、ここ６年間６００～７００万トンで安定している。輸出入の内訳は、輸出 35%、輸入 38%、国内 27%である。取扱量の増加を目指して工夫しているが、重たい貨物（自動車、コンテナなど）を積極的に取り扱っていきたい。６年間でコンテナは倍増した。

●2015 年 10 月にウラジオストク自由港法案が発効。自由港は、新規事業、特に加工事業を後押しする法令。既存の会社は大きな優遇はない見込みである。

【質疑の概要】（○：訪問団、●：アレキサンダー部長）

○境港には、週 2 回しか船が着かない。今後増やしていきたいが、日本からの貨物で一番大きいものは何か。また、対象港は、新潟港か富山港か。

●日本との関係では、取扱量はそう多くない。8 割以上が中国、東南アジアである。日本からは自動車（新車、中古車）が多い。そのほか、２週間に１回、日本国内のそれぞれの港を回ってきてコンテナ船がウラジオストクにやってくる。中身は日用品である。日本向けは、未加工木材、製材、パルプ、石炭などであるが、日本の取引先は純度などの基準が厳しい。中国はその基準が日本よりも緩やかである。
DBS のポテンシャルを活かすことについては我々も期待しているが、内装、乗り心地が悪い。ただ寝るだけではなく少しでも楽しくする必要がある。提案としては、より快適な環境、文化的イベントや、子供連れ向けのサービスなどがあればありがたい。

○確かに乗り心地悪い。昨日もロシア語の表記がないことについて意見があった。韓国の船ではあるが、当初は日本語の表記もなかった。いただいた意見は、船会社に伝えたい。

（２－２）５１番学校

〔応対者〕プソブスカヤ・スヴェトラナ校長他外

51 番学校は、ウラジオストクで最も日本語教育に熱心な学校で、小学校の時から日本語教育を行っている。

【説明の概要】

●鳥取県からは 3 回目の訪問である。

●ロシアの教育制度
・入学前 2~6 歳の児童用準備学校がある。
・小中高一貫教育であり、7～10 歳が小学校、11 歳～15 歳が中学校、16 歳～17 歳が高校
・日本語教育は小学校からでもできる。51 番学校では 2 年から始めている。

●2 年生から 8 年生の教育内容

・ひらかな、カタカナの読み書き、日常生活の漢字100字程度の読み書き
・あいさつ、自己紹介、自然、学校についての簡単な説明ができるようになる事が目標。
・カードを使った学習、漢字ゲームなど日本のゲームを取り入れる工夫をしている。

●高校での教育内容
・文法、語彙を蓄積しまとめる。
・漢字５００字、単語２，０００語
・日本語能力検定Ｎ４程度
（意見、質問、願いを表現できる）

●日本との連携
・総領事館と協力し、日本文化祭などへの参加
・日本センターとの協力
・国士舘大学とも連携している。
・日本語スピーチコンテストなどへの参加
・日本語能力検定の受検

日本語教師陣と教材（手前）など

【質疑の概要】（○：訪問団、●：プソブスカヤ校長）

○第１外国語、第２外国語など選択のプロフラムは。
●最近まで日本語は第１外国語であったが、親から英語のリクエストがあったので、現在は日本語と英語の選択制としている。５年生からは日本語、英語の両方を週３時間ずつ学習する。
○学区は決まっているのか。
●日本のような、学区制ではない。誰でも希望があればいろんな学校には入れる。ウラジオストク近郊の生徒もいるが、結構離れている生徒もいる。日本語は小学生では選択制だが、中学になると１００％履修する。
○この学校の生徒の日本語は、どの程度のレベルで卒業するのか。
●将来的にしっかり勉強したい人もいれば、その希望がない人もいる。いろんな意味で知識を深め、日本に関係する仕事をしたいと考える人たちの入り口にしたいと考えている。生徒の日本語レベルはそれぞれ。一番完璧では日本語検定３級（簡単な日常会話が可能）、普通で４～５。もっと日本語に興味を持ってもらうためのホームステイプログラムにも取り組んでいる。
○母国語が完成しない段階での外国語の学習によって混乱を避ける工夫は。また、早い段階で学習することのメリットは。
●いろいろな意見があるが、２歳から外国語を学ぶ取組もあり、いい刺激になるという意見もある。自分の経験では、早い時期に学習を始めた子の語学力はかなり高い。成長率、全体的なレベルとも高い。最近の特徴として、小学校入学前にしっかりと母国語が勉強できている子が多いので、混乱することは無いと思う。

（２－３）沿海地方経済特区

〔応対者〕カジノスタッフ・セルゲイ氏
経済特区の概要の説明や今後の発展の見込みを調査する予定であったが、先行して建設されているカジノの説明であった。

【説明の概要】
●１０月８日にオープン。すでに中国人を中心に観光客が訪れている。ロシアではカジノは違法

であるが、特区では可能である。
●現時点で稼働しているカジノ特区はここだけであるが、将来的にはあと５つくらいの施設が建設される予定である。
●スタッフは「英語＋α」の２カ国語以上話せる者を雇用している。

カジノ入口（左）とカジノフロント付近（奥の撮影は禁止）

（２－４）北斗画像診断センター

〔応対者〕デニソワ・スヴェトラナ　センター長

【説明の概要】

●センターは北海道の北斗病院が出資している日露合弁企業である。
●医療機器はすべて日本製で、画像処理システムは、ロシアでも４，５カ所しかないものである。
●センターには、MRI、CT など機器があり、この画像を日本に送り、専門医の判断を仰ぐ。最終判断はロシアの医師が行う。

北斗画像診断センター

●画像診断が一般的でなかったロシアでは、ネットを利用した画像診断を行うことにより、海外に渡航して診断を受ける必要がなくなり負担軽減となっている。

【質疑の概要】（○：訪問団、●：デニソワセンター長）

○画像診断の料金はいくらぐらいか
●MRI が 5,000 ルーブル（13,000 円前後）、CT が 3,500 ルーブル（10,000 円前後）、包括検査 35,000 ルーブル（80,000 円前後）。多くは自己負担である。国保対象になるよう働きかけている。
○検査の待ち時間はどれくらいか
●平均１週間待ち。待ち時間が長くなるとかえってスケジュールが乱れやすくなる。
○日本人医師が往診するのか。
●日本人の往診はない。直接関わるのはロシア人医師。ウラジオストク自由港になると、外国人スタッフの就労の可能性があるかもしれない。

センター長から説明を受ける県議団

【平成２７年１１月４日（水）】

（３）ナホトカ港視察及び日本人墓地献花

この日は、ロシアの休日に当たり、調査先で担当者の説明を求めることは困難であったため、ウラジオストク港に最も近い港湾施設であるナホトカ港を利用した交易などの可能性を調査するため、実際のアクセス状況など現地視察を行った。

ウラジオストク市内からナホトカ市内までは、車で片道約３時間半、途中の道路も舗装が不十分な部分もあり、また、大きな町もなく極東地域の連携には改善が必要であると感じた。

木材を積み込んだ貨車

しかし、港湾施設からの輸送は鉄道があり、極東地域において港湾施設は重要な位置づけであると改めて感じた。

ナホトカ港

日本人墓地

また、ナホトカ港に近いシベリア抑留者の日本人墓地を訪れた。

この墓地は、厚生労働省により遺骨収集作業が行われ、５２４柱が収集された。２０１２年ナホトカ市政府により日本政府が建立した石碑を含め、日本人墓地の記念公園として整備されたものである。内田博長団長をはじめ、訪問団全員が献花をし、故郷を遠く離れた地で眠る方々へ思いを馳せた。

【平成２７年１１月５日（木）】

（４―１）日本人死亡者慰霊碑献花

第二次世界大戦終結直前に対日参戦をした旧ソ連軍は、満州、北朝鮮、南樺太、千島に駐留した多くの旧日本兵を収容所に抑留し、土木工事、鉄道工事、炭鉱作業等の重労働を強要、約 10 年間にわたる抑留中に労役、病気、寒さ等により多くの方々が犠牲となっている。

政府要人をはじめ多くの方々が訪れ、献花している。

内田博長団長をはじめ、訪問団全員が献花をし、故郷を遠く離れた地で眠る方々へ思いを馳せた。